

2020長塚英雄ロシアン・アーツ代表取締役インタビュー

1、ロシア文化フェスティバル IN JAPAN 開催の経緯についてお話しください。

2006年1月10日に東京オペラシテイコンサートホールで、ゲルギエフ指揮マリインスキー管弦楽団のコンサートで開幕しましたが、これはプーチン大統領と小泉純一郎首相の日露首脳会談の合意に基づいて開催された2003年のロシアにおける日本文化フェスティバルと毎年ロシアで行われている「日本の秋」「日本の春」に対する返礼として行われたものです。すでに、15回目を数えており、1、827万人が参加し、ロシア人芸術家10、977人が来日参加、のべ468都道府県1179市区町村での開催が積み重ねられています。

2、昨2019年のフェスティバルの特徴はどのようなところにありましたか。

55本のプログラムがありますが、1つはバレエです。エイフマンバレエが21年ぶりに行われ感動をあたえましたし、ヤコブソン記念アカデミーバレエ、ミハイロフスキーバレエと3本のサンクトペテルブルクからのバレエ団が日本で勢ぞろいするのはたいへん珍しいことでした。2つめは、マリインスキーオペラ、ゲルギエフ指揮のマリインスキー管弦楽団、ポリャンスキー指揮のロシア国立交響楽団、第16回チャイコフスキー国際コンクール優勝者ガラコンサートなど高水準のプログラムも特徴の一つでした。3つめは久しぶりにロシア民族楽器のスペシャリストが日本に集合しました。10月にロストフからバラライカとドムラのソリストが3名、第9回大阪国際室内楽フェスティバルでグランプリを獲得したドムラとバヤンのソリスト2名、11月にモスクワからグネシン音楽アカデミー大学教授のモスクワカルテット4名が来日し公演しました。特筆すべきは、7月18日に調印式がおこなわれたロシア連邦国家予算文化機関サンクトペテルブルク音楽会館とロシア文化フェスティバル日本組織委員会の協力協定です。毎年ロシアのソリストを日本に派遣すると同時に、日本人ソリストをサンクトペテルブルクに派遣しコンサートを行うというものです。とくに若手育成に重点があります。

3、ロシアイベント、クラシック興行の動向、変化についてはどうお考えですか。

ここ数年、ロシア文化フェスティバルのほかに「ロシアシーズン」、「日露交流年」が行われ、日露関係の歴史上もっとも多くロシア文化イベントが行われ、大勢の日本市民が鑑賞したことは相互理解を深めるうえで大きく前進したといえますし、テレビ番組やコマースでのロシア関連も非常に目立つようになりました。しかし他方で日本市民の購買力は低下し、オーケストラやオペラ、バレエ公演においては昔と違い、高額なよい座席から売れるのではなく安い席から売れる、有料5、6割が通常であとは低価格のチケットや招待客というのが現状です。ロシアやフランスは文化・芸術は採算が採れて儲かるという

認識ではなく、国家の補助で成り立つものと言う前提認識にたっていますので、圧倒的に零細企業（社員2名～50名）の多い日本のロシア関係のイベント・クラシック興行会社は自転車操業の困難の中で奮戦しているのが実情です。ですから今、132名の国会議員が所属している文化芸術振興議員連盟（河村建夫会長）が推進している文化芸術省の設立運動がきわめて切実な要求となってきています。

4、2020年以降の展望をどう見えていますか。

東京五輪の年である2020年は、民族の平和の祭典ですから、ロシアを象徴する芸術団体のプログラムが組まれています。これぞロシアという民族舞踊の宝庫であるモイセーエフ記念国立アカデミー民族舞踊アンサンブルを23年ぶりに招聘するほか、240年の歴史を誇るボリショイバレエ、モスクワで最も古いフェドセーエフのチャイコフスキーオーケストラ、390年の伝統あるテミルカーノフのサンクトペテルブルグフィルハーモニーなどが目白押しです。この年から両国政府による新しい日露地域交流年も始まります。日露関係は日米関係に左右されてきたのが戦後の歴史ですが、21世紀に入ってからの日露首脳の本格的な努力が地道な成果につながっているように思います。ピョートル1世の命で大阪の漂流民デンベイが日本語教育をペテルブルグで始めたのは1705年のことですが、それから数えて2020年には315周年になります。これは全世界で一番早い日本語教育です。薩摩のソーザとゴンザの日本語学校は1736年に開設されましたが2021年には285周年にもなります。全世界に先駆けたこうした日露の歴史の深いつながりを基礎に2020年の日露和親条約165周年、2021年には日ソ共同宣言65周年を迎えることとなります。

5、ロシアビジネスの現状と課題ーロシアン・アーツ社長としての視点

ロシアン・アーツは、感動・相互理解・創造・社会貢献を理念にする国際文化交流企業です。地球温暖化による環境破壊が進行するなかで唯一環境保護の立場で促進できるのが「文化芸術」の育成と交流です。日露の企業は会社の方針として「心の豊かさ」を求める文化芸術の支援を位置づけることは企業イメージを高めるだけでなく会社繁栄の基礎であると確信します。本来の生産や販売活動が、勇気とやすらぎを与えてくれる豊かな文化・芸術の創造・発展とコラボするならば、大勢の地球市民の支持と共感をもたらすことでしょう。グローバルな国際的な経済協力・経済交流の大きな前進は文化の交流の前進なくしては実現できないでしょう。日露両国は真の文化大国をめざしてほしいものです。

長塚英雄：(株)ロシアン・アーツ代表取締役。ロシア文化フェスティバル日本組織委員会事務局長。日本のなかのロシア研究会主宰。北海道小樽市生まれ。著編書『日露異色の群像30』『続・日露異色の群像30』『続々 日露異色の群像30』『ドラマチック・ロシア in japan 1,2』『ロシアの文化・芸術』『日本のなかのロシア』他多数。